全道展地図

東京だより

「おや，こんなに緑に」美術館の階段を下りながら，ふと見まわすと，あたりはもうすっかり初夏の樹々です。5月は春陽会，現代展，女流展の出品で，毎日の様に美術館通いが続き，桜が散るのもつつじが咲くのも横目で眺めていたのでした。そんなわけで，「東京会員の消息を」とのことですが，いささか困りました。先輩諸先生が，展覧会に次々発表されている御様子は，そちらの方もいろいろご存じのことでしょう。全道展に送られる先生方のお元気な作品をご覧になったら，又よくお判りになると思います。

最近では菊地精二氏個展（日動サロン）を拝見しましたが，全道展の生れた頃の札幌のことが思い出され，なつかしいことでした。

今年に入って，朝日秀作展—小野州一氏の出品，蛯子善悦氏個展（2月東和画廊）菅野充造氏個展（4月秋山画廊）など若手の活躍も目ざましく，高橋由明氏の現代展コンクール受賞で，北海道勢は一層勇気を持ったことでしょう。岸葉子さんもすっかり健康になってよいお仕事をしていらっしゃいますし，全く，このマンモス東京の中で，皆よくやっています。八木保次も久しぶりに6月1日からの個展（村松画廊）があるので制作中です。アトリエは紙屑や絵の具が散乱して，全くひどいものです。私は，サッパリしたカーテンや，小奇麗な椅子などを，時々思い浮べるのですが，仕事を続ける限り，縁がないのでありましょう。

今日もアトリエのドアをあけて，「アーア，ごみ箱の中みたい「とつぶやきますと，ダンナはギョロッと振り向いて，「俺の絵があるんだぞ」と叫びました。きっと（宝石箱）と云いたかったのでしょう。失礼いたしました。（5．25）

八木伸子

札幌の動向

札幌の人口が膨張の一途をたどっているように全道展関係者ものびて，第20回展では入選者35名，会友11名，会員18名の63名も数えるにおよんでいる。その半数以上が一般入選者であることは，底辺の層の厚さを示すものと心強く思っている。むろん量より質にあることはいうまでもないが，多士済々のなかから期待される輩出があるわけで，山崎賢六郎，大江真佐人，清水敦，渋谷恭子，青木淳子らの新人，常連群から中央展，グループ展に動躍をし，陸続としていることである。

会友群では，阿部典英は行動展，渡会純价は春陽，日版展にそれぞれグループ，個展と意慾的な発表をつづけ，岸本裕躬，白井芳雄は行動，谷内丞は国展，新会友の安田郁子は新制作，女流展に出品している。このほか，斎藤，前野，池田，倉沢らはその持味をもって地味な活動をし，江別の諏訪田は道議としても活躍している。

会員群では，国松の中央，道内での発表のほかもろもろの分野での活動範囲広く，そのタフに驚くばかり，元

老の一木は一水，個展の壮者をしのぐ発表ぶり。国井，竹岡は独立美術の会友として選抜展に選ばれ，砂田は新会員となって油がのり，栃内事務所は念願のヨーロッパ旅行を果たし，一層の巾をひろげ，小野垣は体調をそこねて4，5年中央出品を休んだ様だが，少しずつ快方に向っている様子，原は行動の事務所をもち，ことに婦人美術サークルに効果をあげ，後藤，佐藤，浅野は教育者として地味な活動を，久守は車をかって素材をもとめ谷口とともに春陽展に，同じ渋谷は銅版画家としてパリー留学を終えて帰札したばかり。版画の大本は円山の森にアトリエを新築し，彫刻の本田は新制作の会員となり，彫刻のほか釣の権威者になりつつある。山本は新会員として石の彫刻に余念なく新制作に出品。ホットニュースとしては，会計事務の野本は日ソ文化交流で訪ソに旅だったことである。

在札の会員は美術館建設問題をはじめ美術文化活動のかなめとして，いろいろのかたちで働かなければならないことです。ご支援を。（66．6）

谷口一芳

室蘭支部

昨年の全道展において，室蘭地区出品者は以外にも振わなかった。このことは出品数が20回記念展ということもあって例年になく多く2,000点を越し加えて出品作品の水準が高かったことによるとしても当地区出品者は数年来高い入選率を見せていただけに残念であり，年輪20年を経た幹に室蘭支部という枝が伸び悩みのひと節を作った年でもあったと言える。

しかし，全道展室蘭支部を結成してから今年で10年目になり，昨年の低調はともかくとして出品者は年々増加し，長い間文化不毛の地に雌伏しながらも努力し続けてきた作家達が道内美術家地図に大きくランクされる当地区の現状に感慨一入のものがあると思う。そして中央画壇にも結びつき受賞，入選と活発な制作活動を見せる作家も増えお互に刺げきを呼びあっている。

ところで，ここに当地区美術家達の中核となって活躍している支部作家群をあげるならば，高野次郎氏，胃袋の半分も切除した大手術を経て3年その後経過よく復調し会社重役，市議と多忙な中にあって絵も益々快調とか，国展の新人賞から一昨年同展会友に推された渡辺真利氏，地区高教組の副委員長とか，彼も又忙がしい日々の中で制作，そして後進指導にも余念ない。それがあってか当地区には国展出品者が多く，西村徳一，徳橋晧，小林宜子氏等若手作家がクツワを並べている。また一線美術委員の太田実氏はベトナム紛争がもっぱらの画題となる程のソシアルリスト，富樫日出男氏も同会々員として活躍している。行動美術では浅山咲知氏が連続出品そろそろパンチのきいたものをと張り切っているし，二紀会では石塚潔，三浦慶次郎氏等が出品し，石塚氏は街を離れた新装のアトリエでフアイトを燃やし三浦氏は還暦祝いを経たとは思えぬ若々しい絵を見せてくれる。自由美術では諏訪英雄氏がその人柄のように地道に歩を進め，またこのほど長いサラリーマン生活の足を洗った笹谷武氏は見晴しのよい大きなアトリエで画境三昧と言ったところ，若手は鴇田弘，本間常男氏等グループ展などで活躍しているから本展でもいきのよいところを見せてくれそうだ。そして熊谷は二科展特選につぐ昨年は同展会友に推され同会から9月に渡仏を推められたが都合つかづ他日の夢とアキラメた由。

なお，昨年本展で顔を見せなかった面々も昨年の不調挽回にと意慾的な制作に打ち込んでいるから大いに期待したのしみにしている。（66．5．25）

熊谷善正

焼肉と洋食
グリル
川むら
南1条西2南向秋山ビル地階
TEL 23－8585
※小宴会の出来る

小樽の街と絵かき達

坂道と港，港に通う運河の流れは油に淀み古びたハシケと破船が浮上している。

丘からは手宮富士と白赤の灯台港が一望に見え，繁華街を下って海に近い辺りは加工場があり，魚の臭いでいっぱい。明治の昔，鰊で栄えた歴史が壁落ちた建物にこびついている。急ピッチに近代化している札幌とは極めて対称的な街と云えるが，しかし私はこの小樽の街が好きである。

以来この小樽の街を愛し，小樽の街を絵にした画家達が沢山いる。小樽の街からも数多くの画家達が出た。今も道展会員16名，全道展会員６名，新道展会員２名その他，絵をかく人の数は年々共に増している。全道展関係を紹介すると，鈴木伝さん（元行動展）一時体調をそこねて元気がなかったが，最近また元気な姿を見受けます嬉しいことである，行届いた仲々の紳士である。森本三郎さん，奥様も画家，毎年東京で，おし鳥展に回を重ね益々意気は盛んであります。一原有徳さん（国画会版画）版画のみならず，山登りと俳句にもプロ級，温厚ながらしんの強い勉強家である，東京でも数回個展を開いている。千葉七郎さん（二紀展）細い軀だが健康です頑張っています。藤本俊子さん（国画会）昨年は審査に上京されたそうです，その様子を承りました。新覚吉郎（独立）自分のことは誰かが責めてくれると思うので省略。

なお，入選の常連達として斎藤久生（知事賞受賞１回）石川昌平，崎野雄一郎の各位がいる。いづれも仲々健斗精進しておられるので，数少い小樽からの出品者として今後の活躍に大きく期待を寄せている。

新覚吉郎

苫小枚地方・定住・往来

一昨年の春，浦河町から大友一夫君が，市内沼の端に転住してきた。沼の端は，勇払原野のまっ只中の平坦そのものような土地で，抽象の夢を燃やしている。この春の異動で，村元俊郎君が帯広へ（彼は，早速活動を始めたようだ）彫そをやっていた小野健寿君が日高富川へ，抽象にとっくんでいた小出谷潔君が胆振仲洞爺へと移ったが，かわりに幌別から異色の原田省吾君が居を移してきた。

さて，定住組には，先ず，周辺から――。追分には，池本良三君ががんばっている。中央には国展に出品，この春も上京したが，「やられた。参った。」という顔で帰ってきた。作品で勝負は全道展でとのことらしい。穂別には，福井正治君が元気，目下苫小牧九里で昨年の国展作品（120号）を二つに，他，ガッシェを20点もならべ？相変らずのファイトぶりだ。お酒が入ったらいよいよ元気で，ピカソもセザンヌもこてんこてん。劉生の日記が欲しいがないかなあと探している。

市部にいって――鹿毛正三君は，永年の念願かなって，新しく出来た養護学校に転じた。第二の山下清を発掘するようなことを考えているかどうかは不明だが，落ち着いて絵を描けるような境地になったのが何より……。能登正智君は，もっぱら山登専問で，国体なんかにも出場していたが，とうとう体力の限界も見えてきて，いよいよ絵をまじめに描くことになったらしい。静いつな抒情の片桐勉君，丸太や車を描く鈴木善公君，幻想華麗の岡逸子さん，建物に魅力を捧げる中橋靖彦君，抵抗派と称する清野恒夫君，紋称風の抽象の福井宏君，はりがねのような可憐な鳥を描く横山順一郎君，祭りや花火やお酒も好きだという沼田卓君，その他これから全道展でやろうという若い人がぞくぞくといったところ。

遠藤末満

道 東 短 信

道東は7月になってはじめて夏姿になるが，8月お盆が過ぎればもう秋だ。今年は惜しい作家が逝った。

寺島春雄（帯広）55才。病身をおしてなお制作にかりたてたものは何か。厳しい風土への抵抗か。……帯広と釧路で遺作展の計画がある。

望月正男が一年の滞仏を了えて，昨年秋の帰国。新作が期待される。会友では神田日勝，おおとひでお，川瀬敏夫，それに彫刻の富谷道信，斎藤一明らが，今年も活躍することだろう。米坂ヒデノリは昨年暮から岩内——寿都の国道開通記念碑の仕事にかかりっ切りで忙しがっている。この他常連では，藤村正豪，福井凱将，柳悟，古川万洋，高野康平，郷みつる，阿部ススム等が居り，新人の抬頭も目覚ましい。これら新人の層が広く厚くなることが，大げさない方が許されるならば，地球という単位の中で人類の足跡が正しく前向きにしるされることになるのだと思う。ボク達には，いま一つ新人の発掘に伴なうそうした作業が残されている。

日本というとてつもない不条理の国に住み，如何ほどの苦しみをなめながら作家の1人1人が制作に打ち込んでいたかということが，後日語られるときもあるに違いないのだ。（1966．5．13）　米坂ヒデノリ

日高地方の美術

例えば地図のどこかを指して少し探ってみれば，どこでもそうであるように地方文化と云う奴は息たえだえで，それも決って学校の先生達が長いこと細々と守って来たのだから先生族と云うのは，やはり最敬礼する価があるものです。

日高地方なども，まるで細い1本の糸のようにそれぞれ守られ，埋もれた人，死んだ人の山積のなかからそれはやはり受けつがれているようです。全道展会員の佐藤哲夫氏（在札幌）などは50代で生き残ったためずらしい例となるでしょう。40代となると，埋もれた画人は戦争など挟んでいるせいか山積です。なんともはや人間って奴は美神の甘酒にあうと，やたらに情熱家になるらしく押入れから昔のキャンバスを取り出して目を細める画人こそ，ほほえましき挫折者はありません。でも彼等ドンキー・ホーテーがいなければ田舎の美術活動なんて，ありゃしなかったのです。大友一夫氏（全道展会員）は怖ろしく真面目なドンキ・ホーテーで彼が苫小牧に転勤する時は心臓が飛んで行くみたいに日高の連中には思われたものです。

田舎と云うのは面白いもので眠っているようで10年20年と云う長い年月の内に根が出来てくるのでしょう芽が出てきだすとぽっか，ぽっかとすごい勢いで，馬鹿みたいに元気の良い男と女が絵筆を口にくわえたりして現われるのです。先生達から町の兄さん達に，おやじ達に，そしてそれらがサークルを形づくるところなど社会主義者の自然観が，そっくり土から生れてくるものです。

様似町の山口惣市（全道展会員）の大虎から，三石町の久保田実（全展出品者）に初まり，静内町には高橋徳二，岩淵菊雄（全道展出品者）を中心に15人くらい，ガンガンうるさい，うるさい。浦河町には昨年全道展で受賞した藤枝勢一，田村和良。それに出品者星光平，伊藤ユミを中心に20人くらい，よせば良いのに今年も8人くらい全道展に出すそうで今のところ落選組がやたらに，にぎやかで，そば屋のおやじとテレビ屋が話しているのがフオンタナの空間。板前は結婚して出品出来ないと連中が作っている日高美術研究会で，しょぼくれている。さて，これからどう云うことに相なっていくのやら。　伏木田光夫

日本色研
財団法人日本色彩研究所監修
の唯一の色彩教材・色彩資料
●カタログ贈呈●
札幌市北23条西5丁目
ミツハシ 北海教材社
電話(71)4545番・(71)7662番・(71)5459番

全道展のあれこれ・旭川の巻

全道美術の旭川展のあった頃をなつかしいがっている。皆が集まるとその頃の話に花が咲く。㊙の会場で飾付けをやったり，荷造りの手伝いをしたことが思い出される。会員の北修先生始めずい分張切って，意気込みが強く，云いしれない張りがあったようである。先生は，病気だとは思われない程元気である。

左手で描いたほうが良い，と云っている。いろいろな会合にも出席しているようであるから，快方に向っているので安心している。全道展を旭川への願いもかなえられるのも間近かであろう。版画の荻原常良君は新婚ほやほやである。版画もこの程度やるではいけない，油絵にもかなりの力の持主，先年東南アジアへ旅し，その土産とも云うべき仏陀の連作は立派なものである。何か神秘的なものがただよっている。高橋三加子さん，大作に取り組んでいる。画面のどこかに，がっちりした見せどころがほしい。はっきりした，フォルムの追求に余念がない。木村雅子さん，写実による突込みは仲々見ごたえがあったが最近，半具象から抽象に移行しているようである。世相の移りかわりをガラス戸を通して女性らしく解釈しているようである。飛世佑子さん，帯広に行ったが益々意気旺んである。若い人達の進出がめざましい。大きな可能性をはらんでいる。佐々木治，重岡静，西紀年の諸君も元気な所を見せている。美深の伊藤功，温根湯の大江啓二の両君も，相変らず大作に情熱をかたむけている。北見から今春旭川に来た，神田一明夫妻，絵に彫塑に旭川にとってはこの上ない喜びである。何はともあれ，全道展らしいよそにない良さを，みんなが考え，切磋琢磨し努力していきたいものである。

森田喜昇

後志から

後志から全道展に異色の作家を発見し，発表の機会を与えてくれるのは，会員小川原脩（倶知安）で，地方文化向上の功績は極めて大である。一度接すると，その豊かな人間性に感動する。最近のパイプには風格が出て来たし，アトリエでのコーヒ・紅茶等には，特に食通の一端がうかがえて楽しい。

常連長野襄（岩内）は，詩情豊かで，ロンスダレーの風貌からは，薬剤医士が本業であるとはわからない。画風又詩的要素が多い。落ちても全道展の厳しさに誇りをもち，日曜画家として特筆すべき存在である。岩内美術協会創設者の一人でもあり，その若いグループとの親交は特に厚い。一人息子が岩手学大美術科に進学したので，今年も記念すべき仕事をするはず。

奨励賞一度受賞の志津照男（岩内）は，通称「赤の志津」で理論派。美人の奥さんと一緒で小学校教員。北教組支部のよき指導者。それだけに，制作時間が不足になりはしないかと心配である。岩内美協のよき指導者。ここらで一ぱつを期待出来る。

昨年奨励賞の大地康雄（岩内）は，めっきり自信が表われてきた。岩高美術教師。未来の奥さんとローヤルホテルの受賞式に出席する程で，若さに加え，ますます制作に熱が入るだろう。

小石川賢（岩内）は，よき才能を持っている。結婚の喜びから，歌を忘れかけていたが，最近又やり出したので期待したい。役場職員。酒井嘉也（倶知安）常連の一人が見えないのがさびしい。その他に穂井田日出磨（古平）大森亮三（然別）版画などもそろそろ常連の仲間入り。

会友坂口清一は岩内から4月に，札幌平岸小へ転勤。六畳二間のアパートで，自炊をしながら頑張っている。これから本格的に制作しょうと思うが一作毎に壁が厚い。

坂口清一

（函館地方原稿未着のため掲載出来ず残念でした。）

洋画材料とガグブチ専門店

階上画廊（壁面17米）

石井洋画材料店

小樽 ③2492 ③4379